米国の新規アルコール使用障害診断、2016～2025年に36.3％増

2023年に急増した背景には、アルコール関連の診断コード改定が影響した可能性がある。

2026年11月20日（金）



Epic Researchが11月19日（木）に公表した大規模分析によると、米国では2016年から2025年にかけて、アルコール使用障害とアルコール関連肝疾患の新規診断が増加した。

この研究では、対象期間中に医療を受けた18歳以上の成人196,522,676人の診療記録を調べた。その結果、アルコール使用障害の初回診断の年間発生率は、2016年の成人10万人当たり543.1件から2025年には740.5件となり、36.3％上昇した。アルコール関連肝疾患の新規診断は20.6％増え、10万人当たり80.2件から96.7件となった。

Epic Researchによると、アルコール使用障害の増加は特に2023年に顕著だった。2016年から2022年まで比較的安定していた年間発生率は、2023年だけで20.2％上昇し、成人10万人当たり577.2件から693.6件に増えた。報告書は、この急増の一部は実際の発生率の明確な変化ではなく、2022年後半に導入されたアルコール関連疾患の診断コード改定による可能性があるとしている。

今回の調査結果は、米国におけるアルコール関連の健康被害をめぐる全体像に新たな情報を加える

ものだ。Epic Researchは、アルコール使用障害は全米で2,790万人に影響していると推定されるほか、既報の研究によれば、アルコール関連肝疾患による死亡者数は1999年から2022年にかけておよそ倍増したと指摘した。一方、報告書が引用した調査データでは、最近飲酒したと回答した米国成人の割合は、2023年の62％から2025年には54％に低下していた。

報告書によると、この10年間を通じて、男性の診断率は女性を大きく上回った。アルコール使用障害とアルコール関連肝疾患のいずれも、調査対象となった各年で男性の診断率は女性の2倍を超えていた。ただし、相対的な増加率は女性の方が高かった。アルコール使用障害の新規診断は女性で42.6％増えたのに対し、男性では30.0％増だった。アルコール関連肝疾患の新規診断は女性で29.2％、男性で13.3％増加した。

女性の増加率がより高かったものの、診断数の絶対的な増加幅は男性の方が大きかった。アルコール使用障害の診断率は、対象期間中に男性で10万人当たり250.2件上昇したのに対し、女性では145.4件の上昇だった。

年齢層別に見ると、2つの疾患では異なる傾向が見られた。分析対象となったすべての世代で、アルコール使用障害の新規診断が増加した。報告書で1928年から1945年生まれと定義されたサイレント世代では54.3％増加。ベビーブーマー世代では32.3％増え、X世代とミレニアル世代はいずれも約30％増加した。

アルコール関連肝疾患では、同じ傾向は見られなかった。X世代とミレニアル世代では診断が大幅に増えた一方、最も年齢の高い世代では横ばい、または小幅な減少にとどまった。Epic Researchは、高齢であることはアルコール関連肝疾患の確立されたリスク要因だと指摘。若年・中年層での増加の一部は、各人のリスクが直接高まったというより、10年間のうちにリスクが高まる年齢に達した人が増えたことを反映している可能性があるとしている。

アルコール使用障害の診断はZ世代で最も大きく増え、増加率は56.6％だった。ただし報告書によると、同世代は低い水準からの増加であり、調査期間中に成人期を迎え始めたばかりだった。アルコール関連肝疾患の診断率は、Z世代で2017年の10万人当たり1.3件から2025年には16.2件に上昇したが、同世代では依然としてまれな疾患だった。

分析には、Epicが参加医療機関と構築した大規模医療データセット「Cosmos」が用いられた。Epicによると、このデータベースには全米50州に加え、カナダ、レバノン、サウジアラビアの2,200病院と5万を超える診療所から、3億件以上の患者記録が収録されている。今回の研究では、直近の居住地が米国内にあり、各年に活動中の患者とみなされた米国在住の成人に対象を限定した。

研究では、2016～2025年の期間に各患者について条件を満たした最初の診断のみを集計した。アルコール使用障害は、寛解コードを除くICD-10-CMコードF10で特定し、アルコール関連肝疾患はICD-10-CMコードK70.0～K70.4で特定した。

著者らは、データにはいくつかの限界があることも強調した。示された率は年齢標準化されていない粗率であり、経年変化には患者集団の年齢や性別の構成の変化が一部反映されている可能性がある。分母となるのは一般市民ではなく、医療機関を受診した成人だ。また、診断に基づく指標が示すのは、疾患が実際に始まった時点ではなく、初めて正式に記録された時点である。この点は、診療記録に記載されるまでに何年もかけて進行する慢性肝疾患で特に重要となる。

Epic Researchは、診断率の上昇には、疾患の発生率そのものの増加だけでなく、スクリーニングの拡大、より詳細なコード入力、医療利用の変化が影響している可能性もあると述べた。2022年10月1日にアルコール関連のICD-10-CMコード改定が施行された後、2023年からアルコール使用障害の診断が急増した点を考えると、こうした留意は特に重要だ。

こうした留意点はあるものの、今回の分析規模は、保健当局や臨床医、飲料業界の関心を集めるとみられる。調査結果は予防策や、ビール、ワイン、スピリッツ各社による責任ある飲酒の啓発に影響を及ぼす可能性がある。また、アルコール関連リスクを消費者にどう伝え、公衆衛生政策でどう取り扱うべきかをめぐる議論にも、新たな材料を加える可能性がある。

Epicによると、臨床医と研究科学者で構成される独立した2チームがそれぞれ研究を実施し、同様の結論に達した。